京都大学新聞
学生団体
京都大学新聞社
京都市左京区吉田
京都大学構内
(761)2054 直通
(771)8111 (内線2441)
振替・京都3909
(1部30円 1年間1,000円)

忘年会・新年会の御相談承ります
割烹 きよす
懐石料理・寿司・テンプラ
スキヤキ・ナベ料理一切
寺町通今出川上ル
TEL (231)1206 (231)2256 (231)5177 (231)5178 (231)8776

費争学闘

値上げ阻止へ闘争昂揚

各私大で大衆団交を追求
国立大も値上げの方向へ

私学学費値上げ阻争は、各大学当局による休講措置、ロックアウトなどの闘争圧殺策動の強化展開の中で、一旦は沈静化の傾向を示したが、十二月に入り、大学当局による値上げ強行の動きが強まるなかで、再び激しい闘争展開の局面を強いられている。

実大、大蔵官が要求していた国立大授業料値上げに関しては、これを来年から値上げに踏襲しているとの考えが、各学部自治会に対して団交を要求、総決起集会や有終館、学生課封鎖などを行なって当局への攻撃を続けていたが学生の直及に狼狽した学長や教授は一貫して逃亡を続けていた。一回生を中心に多くのグラスで「値上げ白紙撤回一の決議やストライキ決議が上がり、十日には授業ボイコット実の学生など四名が値上げ白紙撤回を要求して明倫館前でハンストを始めるなどしたが、当局は五日朝、冬期休業を繰り上げて同日より全学休講にするという措置を突然発表した。この闘争圧殺措置に対して、同大全学闘、学友会は緊急抗議集会を開くなどして反撃を開始したが、闘争は一月に持越されたという様相が強く、一月下旬の後期試験、二月の入試という最終局面に向けての強固な闘争態勢の構築を進めつつある。

背景には、当時が来年度からの学費値上げ強行を回策している法政大学十七日に一度目の総長、理事団交が行なわれた。団交では、財務理事が理事会決定の試案として約六〇%の大幅学費値上げ案を提示した。これに対して、結果した学生は白紙撤回を要求、総長は「すでに決定した」として厳しく白紙撤回要求を蹴つづけ、長一三百名の激怒で総長室、理事室、時間にわたって総長・理事への追及が続けられたが、団交は結局決裂した。団交後、法政大全共闘は約教会室の封鎖を行ない「大学改革」への徹底した分断化への風潮を帯びている。

十五日に行なわれた自民党文教制度調査会の「教育費」に関する小委員会では「国立大授業料は来年度から引上げるべきである」との意見書をまとめた。その理由として、同小委は「①私大学費値上げ

なども値上げ阻止闘争が展開され、値上げが予定されていた明治大では、来年度値上げ中止からさらに拡大するため、それを是正する必要がある。②この格差が私立大の学園崩壊の一因となっている私大への国庫助成の増額と国立授業料値上げによる面からも学生負担の格差縮少する必要がある。③の三点を挙げ、学生の「公正な負担」を大義名分として大衆収奪を強化することを要求した。

この小委会に出席した高見文相は「中教審答申を忠実に実行するなら、値上げは一年待って四十八年度からにしたい」と意見を述べた。

この第一派遣闘争に続いて、学友会、学部自治会執行部らの総括報告に続いて学友会団体十八日に全学運営組織で学費値上げ阻止中央闘争、十九日二重寮で反対同盟一組の集会、二二日神戸港反弾圧集会、二三日反協定批准阻止中央総決起集会、二四日反協定批准阻止、自然成学粉砕、沖共闘中央総決起集会などが予定されている。

この第一派遣闘争に続いて、学友会団体の中央闘争、沖縄闘争、大学闘争、学費値上げ強行を回策している法政大学十七日に一度目の総長、理事団交が行なわれた。団交では、財務理事が理事会決定の試案として約六〇%の大幅学費値上げ案を提示した。これに対して、結果した学生は白紙撤回を要求、総長は「すでに決定した」として厳しく白紙撤回要求を蹴つづけ、長一三百名の激怒で総長室、理事室、時間にわたって総長・理事への追及が続けられたが、団交は結局決裂した。団交後、法政大全共闘は約教会室の封鎖を行ない「大学改革」への徹底した分断化への風潮を帯びている。

十五日に行なわれた自民党文教制度調査会の「教育費」に関する小委員会では「国立大授業料は来年度から引上げるべきである」との意見書をまとめた。その理由として、同小委は「①私大学費値上げ

なども値上げ阻止闘争が展開され、値上げが予定されていた明治大では、来年度値上げ中止からさらに拡大するため、それを是正する必要がある。②この格差が私立大の学園崩壊の一因となっている私大への国庫助成の増額と国立授業料値上げによる面からも学生負担の格差縮少する必要がある。③の三点を挙げ、学生の「公正な負担」を大義名分として大衆収奪を強化することを要求した。

この小委会に出席した高見文相は「中教審答申を忠実に実行するなら、値上げは一年待って四十八年度からにしたい」と意見を述べた。

京大闘、連続闘争に決起
二波にわたり闘争展開

京都用地では、十二月十一日の中央闘争を軸に、沖縄返還協定および関連法案粉砕へ向けて、十二月第一波連続闘争沖共闘主催のもと開催された。まず集会では、これを実力でしりぞけ撤、介入しようとした機動隊員によって二名が不当逮捕された。しかし沖共闘の部隊は、この様な弾圧、権力が一体となった攻撃にも屈せず、宣伝カーを利用しての集会・デモを最後まで貫徹した。

翌九日は、沖共闘統一情宣日に決められ、プロ統派系は渋谷駅前で七〇年安保戦線の前夜祭集会を行なった。

十二・一沖縄土曜集会法案—関連法案粉砕、返還協定粉砕、批准阻止沖共闘中央総決起集会は、港区芝公園に開催されたが、結局、集会は、デモを最後まで貫徹した。

十二月八日は、沖縄公聴会粉砕闘争がアピール統派・プロレタリア派を中心に展開された。まず集会が数寄屋橋公園に開催されたが、途中赤尾敏（大日本愛国党党首）など右翼による妨害攻撃があり、これを実力でしりぞけた後、デモに移行した。この時、沖共闘の部隊は、この様な弾圧、権力が一体となった攻撃にも屈せず、宣伝カーを利用しての集会・デモを最後まで貫徹した。

十二月十日は、沖縄公聴会粉砕闘争がアピール統派・プロレタリア派を中心に展開された。まず集会が数寄屋橋公園に開催されたが、途中赤尾敏（大日本愛国党党首）など右翼による妨害攻撃があり、これを実力でしりぞけた後、デモに移行した。この時、沖共闘の部隊は、この様な弾圧、権力が一体となった攻撃にも屈せず、宣伝カーを利用しての集会・デモを最後まで貫徹した。

十二月十日は、沖縄公聴会粉砕闘争がアピール統派・プロレタリア派を中心に展開された。まず集会が数寄屋橋公園に開催されたが、途中赤尾敏（大日本愛国党党首）など右翼による妨害攻撃があり、これを実力でしりぞけた後、デモに移行した。この時、沖共闘の部隊は、この様な弾圧、権力が一体となった攻撃にも屈せず、宣伝カーを利用しての集会・デモを最後まで貫徹した。

大阪一公聴会粉砕闘争展開さる

大阪でも沖縄返還協定に関する大阪公聴会が開かれたが、これに対して、公聴会の粉砕へ向けた返還粉砕派の集会が大阪剣崎公園で午後五時半過ぎから開かれた。

集会には、反帝学評、プロレタリア、労働者共闘、など約七十人が結集し、関係法案粉砕、自衛隊派兵阻止を集会で確認した後、剣町公園までのデモを行なった。

闘争委、大衆団交を貫徹す
十二・一〇文学部団交
確認書・自己批判書を獲得

十二月四日付で解雇撤一名を含む会社側の処分攻撃を受けた全金畑鉄工労働組合は、連日実力就労闘争を行なってきたが、十六日、会社側との団交で解雇撤回をかち取った。

冬期一時金闘争のさなか、二月四日、会社側は一〇月21日、11月10・19日の各二十四時間ストライキは政治目的のものであり、これは就業規則違反であるとして、全金京滋地本畑鉄工所支部の諸冒解雇、会計、執行委員三名の十日間出勤停止、罰る組合員の五日～四日間の出勤停止処分を発表した。

この処分攻撃を全金畑労組は、69年ロック闘争後生れた畑第二組合の部分的戦闘化を恐つつある第一組合を全金畑支部の組織破壊と把え、連来あげての六日から連日、実力就労闘争を門前、工場、内集会をして展開し、その七名、会社側との団交を解雇撤回を勝ち取った。

九日には「地区と産別を貫く青年労働者との共闘闘争をとおして政治処分・組合破壊攻撃を粉砕し、処分白紙撤回をかちとろう」という畑労組の呼びかけに応え、約一百名の青年労働者、学生が早朝七時半、門前に結集し、ヘいを乗り越えて工場内ではいった。直ちに畑労組を先頭に「解雇粉砕・闘争勝利！」をコールしながら工場内をデモンストレーションし、会社側に「解雇処分攻撃即時白紙撤回」を迫った。

この闘争には、今秋10・21・11月の中で形成されてきた京都における青年労働者の産別、規模闘に結集し批判的に闘争を共に闘った全金京内支部、内集労組などが結集した他、社青同京都本部（プロ学研）労働者、全関西反帝学評連合の学生、社青同（社会主義協会系田派）の学生、労働者など」が結集し、熱気に溢れた交流集会だった。

工場デモのあと会社事務所前で「不当処分粉砕！全金潰滅攻撃粉砕・総決起集会」が開催され、金金畑支部から「われわれは10・21、11・10、11・19に不況の労働者へのしわよせ粉砕！」を掲げて72時間のストを打ち抜いた。労働者の闘いは、経済闘争のみに歪曲されるものでもない。条件闘争にとどまるものでもない。金属化の原因、不況の原因を問題にしたすなわち反合闘争の中に政治闘争を労働者自身が職場の中にもちこむと必抜きにしては労働者の生活を維持もできない。72沖縄返還は、帝国主義アルジョアジーの本土・沖縄労働者人民への支配・抑圧の強化であり、これに抗する部分への社会的共闘の宣言、その一環としての同処分攻撃。処分撤回を要求してたたかう。

畑鉄工労組

政治ストへの処分を粉砕
連日の実力就労闘争を貫徹

十二月四日付で解雇撤一名を含む会社側の処分攻撃を受けた全金畑鉄工労働組合は、連日実力就労闘争を行なってきたが、十六日、会社側との団交で解雇撤回をかち取った。

冬期一時金闘争のさなか、二月四日、会社側は一〇月21日、11月10・19日の各二十四時間ストライキは政治目的のものであり、これは就業規則違反であるとして、全金京滋地本畑鉄工所支部の諸冒解雇、会計、執行委員三名の十日間出勤停止、罰る組合員の五日～四日間の出勤停止処分を発表した。

この処分攻撃を全金畑労組は、69年ロック闘争後生れた畑第二組合の部分的戦闘化を恐つつある第一組合を全金畑支部の組織破壊と把え、連来あげての六日から連日、実力就労闘争を門前、工場、内集会をして展開し、その七名、会社側との団交で解雇撤回をかち取った。

九日には「地区と産別を貫く青年労働者との共闘闘争をとおして政治処分・組合破壊攻撃を粉砕し、処分白紙撤回をかちとろう」という畑労組の呼びかけに応え、約一百名の青年労働者、学生が早朝七時半、門前に結集し、ヘいを乗り越えて工場内ではいった。直ちに畑労組を先頭に「解雇粉砕・闘争勝利！」をコールしながら工場内をデモンストレーションし、会社側に「解雇処分攻撃即時白紙撤回」を迫った。

この闘争には、今秋10・21・11月の中で形成されてきた京都における青年労働者の産別、規模闘に結集し批判的に闘争を共に闘った全金京内支部、内集労組などが結集した他、社青同京都本部（プロ学研）労働者、全関西反帝学評連合の学生、社青同（社会主義協会系田派）の学生、労働者など」が結集し、熱気に溢れた交流集会だった。

工場デモのあと会社事務所前で「不当処分粉砕！全金潰滅攻撃粉砕・総決起集会」が開催され、金金畑支部から「われわれは10・21、11・10、11・19に不況の労働者へのしわよせ粉砕！」を掲げて72時間のストを打ち抜いた。労働者の闘いは、経済闘争のみに歪曲されるものでもない。条件闘争にとどまるものでもない。金属化の原因、不況の原因を問題にしたすなわち反合闘争の中に政治闘争を労働者自身が職場の中にもちこむと必抜きにしては労働者の生活を維持もできない。72沖縄返還は、帝国主義アルジョアジーの本土・沖縄労働者人民への支配・抑圧の強化であり、これに抗する部分への社会的共闘の宣言、その一環としての同処分攻撃。処分撤回を要求してたたかう。処分攻撃を粉砕闘争を実力就労闘争として展開し、

ルポ　11・14―24　首都

「返還協定批准阻止連続闘争」

全世界を覆ったこの資本制社会の深部からの改革と帝国主義の死活をかけた革命の反革命勢力との対決する民衆政治勢力は、この闘争の一切の矛盾の根底的突破―「二つの世界革命」の現実的開示と政治権力奪取―武装蜂起を課題としつつ、にもかかわらず、プロレタリアートの闘争の未成熟の中で「くり返しの敗北」をくぐってより鮮明にそのことを突き出しつつ前進をかちとらんとしている。

六月に続き十一月の「本土―沖縄を貫いて闘われた沖縄返還粉砕の闘いは様々な不十分性を含みつつ、十〇年代闘争の展望を着実に切り拓いたと言えるだろう。

今回は一五四八号に続き十九日から二十四日迄での首都での連続闘争のルポを送る。（編集部）

〈下〉

一一・一九　政府中枢へ

11月19日官邸東京。国会、首相官邸への道は、六月にもまして、否以前のいずれの闘争にもまして強かった。だがしかし、返還粉砕、政府打倒の初冬の寒風のもの武装突撃進撃の闘いはブルジョアジーの支配を揺がす本格的闘いの開始の跫音であった。

東大教養学部を出撃拠点とした沖共闘の部隊千五百人は全員がヘルメッとをかぶり、鉄パイプ、火瓶びん、石、その他あらゆるものを武器にして、今日的武装の水準を駆使して、機動隊の壁を突破し政治権力中枢への進撃として、夜のとばりの降りるころ、渋谷から国会方面へ突撃を開始した。敵権力も、装甲車、放水車、ガス撒布車・ガス銃など全ゆる装備・武器と第3・4・5・6機動隊などの三千人のもつる最強部隊を」の沖共闘の部隊に対して向けてきた。

東大教養から渋谷にかけて、激闘は二時間以上にわたった。バイブがうなり、火炎ビンが、サク烈する中で、機動隊の阻止線はたびたび崩れた。

それに対して、ガス銃の水平乱射、装甲車でブルスピードで隊列に突っ込むなど暴虐な弾圧が行なわれた。機動隊の指揮車のマイクがヒステリックに叫ぶ「死んでもかまわん、前に出てやっつけろ」

機動隊が、包囲網を縮める。そして武器がつぎに出、遂にバリケードをもやぶり、出撃拠点の東大教養へ乱入した。寮内まで乱入し機動隊によって無差別のテロと不当逮捕が行なわれた。

隊列にまきれこんでいた私服が逃げおくれたものを「こいつが指揮者だ」と機動隊に突き出す。また寮内の民青は、逃げ込んだ者を権力に売り渡すというパレンチなことをやってのけた。

同じころ、ストライキで決起した労働者を中心とする沖共闘の別部隊二千五百人は、碑川公園に結集して、東大教養からの決起に呼応して、政府中枢へ向けた闘いを行なっていた。

スター顔まけの不破書記局長の「笑顔」は国民、政党に喜びをもたらす。

「われわれは今度の選挙批准に対して沖縄出身議員のように悩んだり涙しんだりしない。沖縄問題の解決は国会の中にはない」（沖縄のビン）はもっともよくこ

の答を出そうとしている。

二十二日の社・共・総評の集会で、沖縄県労協の仲吉氏は「返還協定」が着々と進んでゆくのに、本土では、労働者に対する攻撃による矛盾の強化を粉砕するものとして闘われていない。誰に対するものでもなく、沖縄の労働者は自分自

身で闘い抜くしかないだろう」という言葉の発言をしていた。

「国民的怒りに基礎を置いた政治権力中枢への進撃として、夜のとばりの降りるころ、渋谷から国会方面へ突撃を開始した。敵権力も、装甲車、放水車、ガス撒布車・ガス銃など全ゆる装備・武器と第3・4・5・6機動隊などの三千人のもつる最強部隊を」の沖共闘の部隊に対して向けてきた。

東大教養から渋谷にかけて、激闘は二時間以上にわたった。バイブがうなり、火炎ビンが、サク烈する中で、機動隊の阻止線はたびたび崩れた。

それに対して、ガス銃の水平乱射、装甲車でブルスピードで隊列に突っ込むなど暴虐な弾圧が行なわれた。機動隊の指揮車のマイクがヒステリックに叫ぶ「死んでもかまわん、前に出てやっつけろ」

機動隊が、包囲網を縮める。そして武器がつぎに出、遂にバリケードをもやぶり、出撃拠点の東大教養へ乱入した。寮内まで乱入し機動隊によって無差別のテロと不当逮捕が行なわれた。

また、「蹴っ関・銀座事動」をかかげた中核派を中心とする千人、時は、日比谷公園に集まり、午後八時過ぎから、公園周辺及び銀座、有楽町で非常に多くの人びとが集まった。

この日の沖共闘の武装進撃は、現実的にみれば、六十九年四・二八闘争などと比べ、その地域的ひろがり、規模、武器などの点で下まわるものであったかのようである。

それに加えて、ある反戦派の労働者が「沖共闘の集会が二つになったし、われわれも実力闘争を決意していたのに……」と話していたが、沖共闘に結集する部分の中での一定の戦術上の対立が含まれて闘われたこともあり、現実の闘争展開としては、返還粉砕派の結集した突撃力という点で、いま一歩不十分であったという実感はぬぐいきれなかった。

しかし、沖共闘に結集した部隊の武装の水準は、部隊の組織性において、各派・各戦線・大学除列を結集した全員が、一人残らず武装し、また「の」鉄棒、打撃棒、打倒対象をもったより高い水準のものであったという点で、今日の他闘争の闘いの中で抜きんでたものであった。

この日には、六十九年十・十一月度安保闘争における深夜東京団という形態を越えんとする、大衆的政治闘争が権力闘争をみつめた武装突撃の水準へと、九月三里塚強制代執行阻止闘争の爆発と、この闘争の中で、二十二日には沖共闘と プロ統派などが社共・総評系の集会に民青党や協会派の労働者を集会に参加させて介入した。

これは総評、民同の解体と帝国主義労働運動の台頭という時代の中で、資本の専制支配の強化が、マル生運動による第三次合理化の

最終的直撃が、第四次合理化の全面的開始へ向けて進む工場・職場からそれに抗しつつ、そのエネルギーをもって政治化する青年労働者の闘いの方向を「総闘運動」と「全面反撃」というスローガンの方針に集約させず、返還粉砕・政府打倒の実力闘争として提起せんとしたものであった。

しかし総じて、明治公園という広い会場と、五・六万人いたと思われる多数の参加者の中で、沖青同、プロ統派の隊列はあるにもかかわらず、そもそも機動隊の弾圧で、大会流による実力進撃はかちとれなかった。

また、復帰協国会行動―二十二日の沖縄に帰ったが一日行動をともにした反帝労働者共闘会議の「労闘」行動、様々な労働者の組織・闘争団体・集会などで、「本土」の闘う労働者との連帯・交流を深めた。その中で今後の沖縄における闘いの方向を整理して、「現在の沖縄労働者人民の闘いが、三次にわたる復帰論の分裂を経て、今転換点にたたされていること。基地撤撤・ブンチ地獄の中でそれに抗して、戦闘的・大衆的に結んできた復帰運動は、日米帝国主義ブルジョアジーが日米共同声明によって72年返還が決定して以来・それを逆手に取りつつその矛盾・支配の強化をたくらんでおり、これに対しての祖国復帰要求という国民主義的・民族主義的誤解を受後して、その闘いを歴史的に継承しつつ、階級的に発展させていくことが要請されている。返還による一体化・合理化攻撃に対して、全官労・官公労などによって、階級的な反撃が開始されている。米軍予定される自衛隊の沖縄への派兵を実力阻止する闘いを沖

の戦後始末」日本支配階級の独立・延命と引き換えに米軍の軍事に尽しがたい反革命抑圧支配を余儀なくされてきた。

こうした沖縄労働者人民にとって72年返還とは、復帰合理化の中での失業であり、米帝国主義支配下で実力で奪還した諸権利の「本土一体化」にほとんどはく滅以外のものでもない。

このことを、闘う日本労働者人民の側から見えかえすならば、戦後の激動期における革命の敗北を通して、沖縄人民の怒りを許さざるを得ないかつての歴史的階級的反逆者をこの中、沖縄人民の「復帰不安」の組織の中からのゼネスト決起に応ずる日本の労働者階級の闘い、すなわち、プロレタリア権力の打倒から労働者権力樹立の本格的準備（政府権力問題）を対自化していく闘いとして抵抗阻止・返還粉砕闘争はあったのである。

……

六月の全国全共闘・全国反戦の中から十月結成された沖共闘は、還粉砕―目標反派兵阻止闘争議（沖共闘）は、議会内外の小市民的闘争運動と区別されて、政治権力中枢（国会、首相官邸）への実力攻撃を運動目標とした。隊列への上一致の場として同盟的だった。そのような中で、総評闘争の決起は、従来の政治闘争、議会闘争の枠を越えて、沖縄返還粉砕・批准阻止闘争の中心として、闘争の展開を中心とする人民戦線派を浸潤しそなかったとはいえ、返還粉砕闘争の組織しきったことである。とりわけ11公然たる組織化した登場と一定成の総評青年労働者の介入は、帝国主義労働運動の弱点を突き、返還粉砕闘争の拡大の政府打倒闘争への労働者反戦派の介入は、帝国主義労働運動の弱点を突き、返還粉砕闘争の拡大の政府打倒闘争への労働者反戦派の総評青年労働者の組織化の差を通じ資本の運動の生み出す諸矛盾を労働者人民に結集し、課題を整理することが「最後の」「国の完全崩壊」に向けて不可欠の作業であることを銘記し、以下の総括視点を提者諸兄と共有していきたい。

……

学園評論

沖縄闘争の世界性

批准阻止闘争の中で

72年沖縄返還を節目に帝国主義ブルジョアジーは、返還の具体的内容を取り決めた協定の国会批准を衆院で強行切り、あと諮問での採決を衆院でたし切り、あと諮問での採決を衆院委員会で強行採決に踏切して「国民的怒り」を組織せんと「国会」の強行採決の